

「思川開発事業の検証に係る検討報告書（素案）」に対する関係住民の意見聴取

平成 28 年 5 月 13 日（金）10:00～10:20

国土交通省利根川上流河川事務所 2 階大会議室

発言者：意見発表者 1

私は、栃木県小山市在住、●●と申します。「思川開発事業の検証に係る検討報告書（素案）」について意見を述べさせていただきます。

私の住んでいる地域は、栃木県の最南端で、渡良瀬遊水地に隣接しており、また、思川、巴波川に囲まれている閉鎖的な地域であります。普段は自然豊かな緑の多い、田園風景も素晴らしいところではありますが、一旦、台風、大雨になりますと一変しまして周囲が大きく変わってしまいます。

忘れもしない今から 69 年前、昭和 22 年、1947 年 9 月の「カスリーン台風」。当時私は 11 歳でしたが、それまで経験したことのない恐ろしい出来事でしたので、69 年過ぎた今でも、当時の状況が部分的にですが鮮明によみがえってまいります。

当時の渡良瀬遊水地は、戦後間もないときでありましたので、現在のように調節化されていなかったため、川の増水で水が遊水地内に入ると湖か海のような状態になってしまいました。カスリーン台風の通過した後の風の吹き返しで荒波となって堤防に打ち寄せ、木材などが堤防に当たり堤防を破損させてしまいました。堤防の崩れたところを消防団の人たちがコモ、今はビニールシートなんかもありますが、当時はワラでつくったコモを張って、竹を打ち込んで崩れたところを防いでいました。私は、遊水地がこんな情景になったのを見て、子供ながら鳥肌が立つほどの恐怖を体にしみこまされました。

夜半に半鐘が乱打され、越水により堤防が決壊してしまいました。私もまだ 11 歳の子供でしたので何をしてよいのかわからず、ただうろたえていたことを覚えています。

当時の家は、基礎といえば玉石を置いた上に土台が乗っかっているだけで、屋根はカヤぶき屋根が多く、水がひさしまで来ると家が浮き出し、水の勢いで流れたのが多くありました。

後から旧生井村の資料でわかったのですが、旧生井村、現在 小山市だけでも、死者 11 名、負傷者 49 名、流出家屋 144 棟、全壊 46 棟、床上浸水 646 戸という大きな被害だったことがわかりました。

また、近年は、地球温暖化による異常気象などで、全国各地でも大きな災害により被害が報道されていますが、私の地域でも幾度か水害の危機にさらされており、平成 10 年にも避難勧告が出され、私も避難をしました。

また、昨年、平成 27 年 9 月関東・東北豪雨において、内水の増水、思川、巴波川の増水により、思川乙女水位観測所で平常の水位より約 10 メートルも増水し、堤防の天端近くまで水位が達し決壊寸前の状態になり、我々住民に避難勧告が発令され、各自指定の避

難場所へ行きました。

私は日ごろより、渡良瀬遊水地は首都圏を守る施設かと認識していましたが、今回、思川の洪水を遊水地に流入させて貯留した結果、思川の水位が下がり、堤防の決壊を防げたこと、これらは行政の努力、利根川上流水害対策支部の配慮によることを知り、地域の住民として感謝しております。

私たちが生活している周辺地域でも、渡良瀬遊水地は地域の安全を保つため必要な施設だと、今回よくわかりました。

なお、私が想定していることは、遊水地が洪水で満杯になり、なお大雨が降り続き、上流からの水が思川、巴波川に流れ込んだらと想定しますと、思川上流の整備が必要だと強く思っております。

思川最下流で生活している住民として、上流にダムができて水の調節ができればとの思いで、早期の南摩ダムの完成を願っております。私たちの地域が一日も早く安全で安心して暮らせるよう、よろしくお願いいたします。以上です。